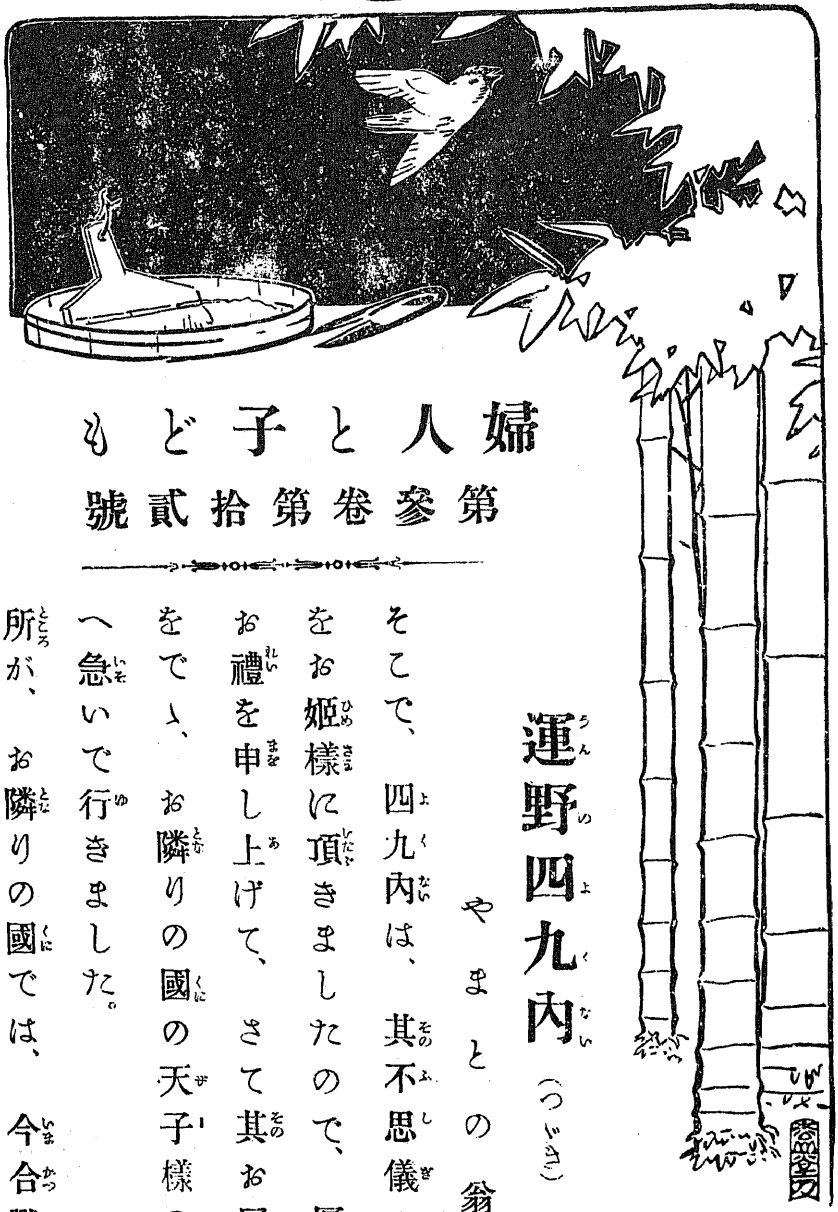


婦人と子ども
第參卷第拾貳號

運野四九内（つゞき）

やまとの翁

そこで、四九内は、其不思儀の劍をお姫様に頂きましたので、厚くお禮を申し上げて、さて其お屋敷をでゝ、お隣りの國の天子様の所へ急いで行きました。

所が、お隣りの國では、今合戦の

最中で、天子様は敵軍の爲に、ひどく苦しめられて居る所なんです。そこへ、四九内が行って、天子様に『此敵は、私が引き受けて、うち負かして上げましょー』と、申し上げたので、天子様は、大變にお喜びになって『戰爭の事は、一切四九内に任せるから、どーか、敵を追ひ退けてくれ』といって、お頼みになりました。

そこで、四九内は、かの劍を腰にさいて、一人の家來も引きつれず、たった一人きりで、敵の陣へ押しかけて行きました。すると敵の大將軍は馬に乘って、大勢の軍勢を引きつれて、出て來ましたが四九内が、たった一人で立って居るのを見て、『なんだ此野郎！、一人で何と思って來たのか』と思ひながら、馬を

飛ばせて進んで來ようとする所を、待ちまうけた四九内は、いきなり其劒を拔いて、四方八方に振り廻はした、すると不思儀にも、敵の大將軍は、忽ち馬から落ちて死んで仕舞つたし、ついて居た軍勢ども、殘らずバタ〳〵と斃れて仕舞ひました。

天子樣は家來どもと一所に、遠くから四九内の働きを御覽になって居って、ひどく感心して、夫から四九内をつれて歸って、澤山に御褒美を下すって其上に、雪姫といふたった一人のお姫樣までも下さいました。

所が敵の方では、折角勝ちかゝつて居た所を四九内の爲めに、負けて仕舞ったので、ひどく殘念に思ってどうかしてこの四九内をない者にしたいと、いろ〳〵考へた末、とう〳〵廻はし者

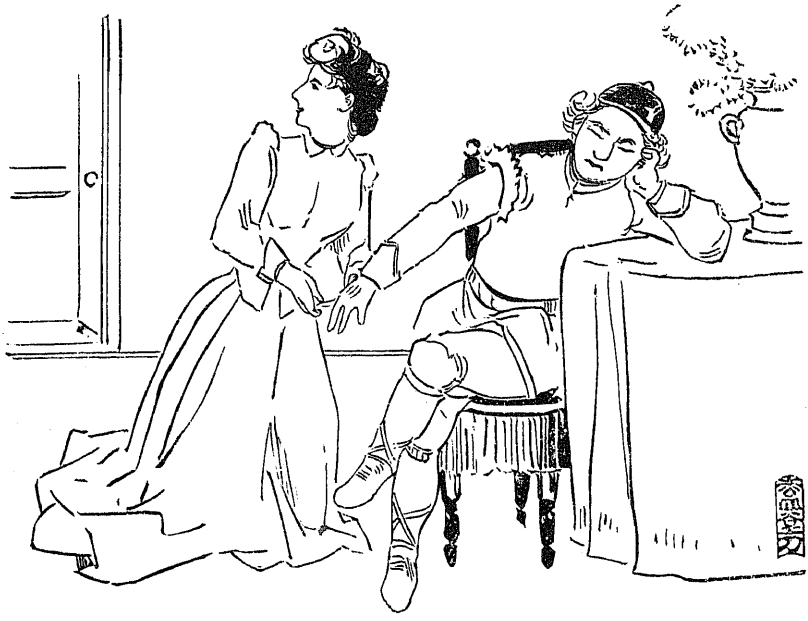
を使って、雪姫を味方につけて、四九内を殺そうとしました。

そこで、其廻はし者が、雪姫に相談して、四九内の不思儀の力が、どこにあるのかといふことを見付けだして、夫から、其力を取って仕舞って、其後でうまくと四九内を殺して仕舞はうといふことに決めました。

そこで、或日のこと、雪姫は、何も知らぬ顔で、四九内に申しました。

『あなた、此間、あないな大勢の敵をうち亡ぼしなすった不思儀の力を、どうしておもちになって居ます』

すると四九内は、『夫はね』といって、言ひかけてから、はっと氣がついて、そうく七年の間は、誰にもいってはいけないの



だったと思い直して、

『其力かい、僕の力はね、そうだ　この手袋の中にあるのだよ』

と言ひました。

そこで、雪姫は、さてはと思って、或晩　四九内のよく寢て居る時に、そーっと、手袋を盗んで仕舞って、さて、敵の方へ其事を言ってやりました。

敵は、其事を聞いて、大變に喜んで、夫ならばもう大丈夫だと

思って、其次の日　四九内が馬に乘って出て來た所を　大勢が待ち伏せをして、斬り殺さうとした所が、四九内は平氣なもので、彼の劍を拔いて振り廻はしたから、堪らないみんな、ばたく〳〵と斃れて仕舞った。

之ではいかぬといふので、雪姫は　又四九内に尋ねました。

『ねーあなた、まーあの樣な不思儀な力が、あなたのどこに居るの？

しかし四九内は中々油斷をしない

『おれの力か　夫はね、をれの長靴の中に在るのだ』

さてはと思って、雪姫は、またそーっと四九内の長靴を盜んで

さて敵に知らせてやりました。所が敵の方では、今度こそはと

思って、又待ち伏をした所が、また〳〵あべこべにひどい目に遭ひました。

そこで、雪姫は、又四九内に尋ねます。

「ねー、あなた、あの樣な不思儀の力が、一体どこにありますの？

四九内は、もうるさくなって來て、

『にー　面倒くさいな、れれの力は、この劍の中の在るのだよ、この劍を持って居る以上は、誰だっておれには叶はないさ』

四九内は、とう〳〵眞實の事を言って仕舞ひました。そこで雪姫は、とう〳〵其劍を盜み出して、敵に渡してやると、敵は忽ち四九内をとって押へて、可愛相にづだ〳〵に四九内を切って

仕舞って、さて其死骸を袋に入れて、夫を馬に積んで、追ひ出して仕舞ひました。

所が、不思儀なことには、其馬がどこともなく驅けって行ってとう〳〵彼の蛇姫の屋敷へ驅けこんで行きました。

すると例の蛇姫が夫を見て。

『おや〳〵、四九内がまた〳〵やりそこねたと見えるよ』

といって、其袋を下ろして、きれ〳〵の死骸を丁寧につぎ合せて、さて夫を治療の水で洗って、つぎに又命の水を吹きかけた所が、不思儀にも、四九内は忽ち生き返って、すっくとそこに立ち上りました。

蛇姫はにこ〳〵しながら、

『言はないことか、七年の間誰にも話してならないと云ふ約束を守らないから、こんなひどい目に遭ったじやないか、然し過ぎた事はしようがない、そこで、も一度、私はお前を天子樣の方へ行かしてやるから』

といって、蛇姫は、鞭をもって來て、四九内の脊中を打った所が、不思儀や、忽ち立派な馬になって仕舞って、一聲高く嘶いて、天子樣の國の方へ飛んで行きました。

所が、此方では、天子樣は、左樣なことゝは知らないで、或朝早く起きて見た所が、門の前に一匹の逞しい馬が立って居る。

『やー、これは見事な馬だ』といって、すぐ庭に連れて來て、あちらこちら乘って見て、夫から、雪姫を呼んで來て見せまし

た。

所が、雪姫は其馬を一目見た許りで、忽ち顔色を變へて、

『おや大變、お父さん、この馬は屹度、私の生命を取りますから、どうか、すぐ殺して仕舞って頂戴な』

と叫び出しました。

天子樣は、夫を聞いて　不思儀なことをいふと思ひましたが、大事のお姫樣のいふ事だから、仕方がない、可愛相だと思ひながら、其馬を殺させる事となりました。

すると、一人の侍女が、夫を聞いて、いかにも可愛相でならない所から、馬の側に行って、さま〳〵と慰めてやりました所が、馬も侍女の情に感ぜたと見えて、しきりに悲しげな聲をして侍

女の方を向いて嘶いて居ましたが、とう〳〵家來どもの爲に殺されて仕舞ひました。

侍女は、どうにも不憫に思って、其馬の血を取って花園へ丁寧に埋めてやりました。

所が、不思儀にも、其血を埋めた所から、まことに立派な櫻の木が一本生えて來た、其立派さといったら、一枚一枚の葉が、皆金だの銀だのから出來て居て、花の咲いた所は、丸でダイヤモンドを幷べた樣です。

餘りの立派さに、天子樣も驚いて、すぐ雪姫を呼んで見せました所が、雪姫は又一目見て、

『オや大變、此櫻は屹度私の生命を取るに違いない、どうかす

ぐと切って仕舞って頂戴』

と叫び出しました。天子様は

『まー、こんな見事な木を、どうして切って仕舞へるものか』

といって見ましたが、何度も〳〵雪姫がいって已まないから、

とう〳〵これを切って仕舞ふことにしました。

すると、あの侍女は、折角馬の血を埋めた所から生ひて來た此櫻の木を切り倒してしまうことが、どうにも惜しくって堪らないので、そーっと其花の一片を取って、夫をお庭の池に投げました所が、奇妙なことには、其花瓣が忽ち一羽の立派な鴨になって、池の中を、あちらこちらと、面白そーに泳ぎ廻はって居ます。

天子様は、夫を見て、『オや、奇麗な鴨だな』といって丁度、夏の暑い時でしたから、自分も、いきなり裸體になって池に飛び込で、其鴨の行く方へ、行く方へと泳いで居ますと、鴨はだんだん岸の方へ泳いで來て、ひよいと、岸へ上って天子様の脱ぎすてた衣服を着たと思ふと驚くべし、鴨だと思ったのが彼の四九内であった。

天子様は、夫とは知らないで忽ち夫と見て、刀を拔いて、岸に上って來た所が、四九内は、切り殺して仕舞ひました。

夫から、宮殿に歸って、雪姫を呼ひ出して、『之は』と思って驚く所を、之も仝じく斬り殺して仕舞って、さて、彼の侍女を召し出して、

『お前は、眞實に私の第二のおっ母さんだ、今からはおれの第二の妻にしよう』

といって、夫からは、四九内が、此國の天子樣になって、いつまでも〳〵二人で仲よく繁昌にくらしましたとさ。

めでたし〳〵